

温古知新② 南総里見八犬伝 2 1  
笑顔礼讃西東

圓座 (愛知県・名古屋) 京都吟行 2 3

方代の里なかみち短歌大会 (山梨県・甲府市) 4  
祝・10周年 特別企画 ① 5

投稿作品 6 10  
心に残った作品 10

詠み人スクランブル(「春」と言って思い出す文学作品は?) 11 13

新潟ぶらり／白根グレイプガーデン 13

お客様の「リレーエッセイ」 高橋典之様 14

ニュースあれこれ 15

詠み人の「リレーエッセイ」歌人 山田航様 16

4

April  
Vol.67

\*  
「喜怒哀楽」は、  
文芸を楽しむ方々の  
活力の源を目指し  
(株)ミュージック・コーポレーション  
喜怒哀楽書房が  
隔月発行している  
情報誌です。

喜怒哀楽  
詠み人応援マガジン

詩歌俳柳壇 ニュース

喜怒哀楽

温古知新②

## 「南総里見八犬伝」2

前回は、大(金碗大輔)が八犬士を探して旅立つところまでをご紹介しました。今回は……。

結城合戦で、大塚番作は名刀村雨丸を持って落ち延びます。故郷武蔵国大塚に帰りますが親は亡く、異母姉亀篠とその夫蓼六が家督を継いでいました。そのため大塚と改名、隠棲します。大塚家に生まれた子は次々と夭折。番作の妻手束は「今度こそ」と日々弁財天に願いますが、ある夜、犬にまたがった神女があらわれて光る珠を残して消え、直後に懐妊しました。生まれた男子は、「女の子として育てると無事に育つ」という言い伝えにしたがって信乃と命名され健やかに育ちます。

大塚村長の家にひきとられた信乃は、大塚家の養女・浜路と許嫁に。

ある日、信乃の監視役の下男額蔵は、信乃の体に自分と同じ痣を発見。信乃が自分と同じ「文字の浮きでる珠」(信乃は「孝」、額蔵は「義」の玉)を持っていることを知ります。信乃と額蔵は義兄弟の契りを結び、信乃との間では犬川莊助と名のすることに。

その頃、許我公方成氏が関東足利家を再興。

そこで、亀篠と蓼六は「関東足利家の重宝・村雨丸を成氏公に返しに行きなさい」と信乃に旅立ちをすすめます。信乃を亡き者として浜路を陣代の側妾にしようとする企みであり、村雨丸は蓼六夫婦の指示で浪人網乾左母二郎が偽物にすりかえていました。

旅立ち前夜。浜路は信乃に「私も連れて行って下さい」と迫ります。しかし、信乃は「必ず戻るから」と浜路の申し出を断り旅立ったのでした。

その後、浜路は死のうとしますが、網乾左母二郎が連れ去ってしまいます。村雨丸がすりかえられたことを知った浜路は、信乃のために村雨丸をとりもどそうとしますが殺されてしまいました。その時、関東管領・扇谷定正に滅ぼされた豊島一族の犬山道節があらわれ網乾左母二郎を斬ります。浜路は実は犬山道節の妹だったのです。

その後、信乃を見送った帰りの莊助と道節との戦いの中、「義」の珠の入った莊助の守り袋が道節の刀にからみとられ、また莊助の刀が道節の肩を斬った時に珠が飛び出し莊助の胸元へ。その隙に道節は行方をくらましてしまいます。

村雨丸が偽物のまま旅立ってしまった信乃。これから長い物語が動き出します。

次回、また新たな犬士の登場です。

(古川久美子)

# 圓座 京都吟行

主宰 武藤紀子様

(愛知県 名古屋市)

桃の節句の3月2〜3日、「圓座」設立2周年の京都吟行に、東京都・国分寺市の支部「むさしの句会」の6名同行させていただきました。

7:30 東京発―京都市行き新幹線ののつけから酒盛りが始まり、これが仕事でなければ…と思いつつ、半ば強制的な勧めもあり、いた仕方なく杯を受ける(笑)。京都駅で各地から参集した会員と数人ずつタクシーに分乗し、本日の宿「綿善旅館」に荷物を置き、その足で人形寺と称される「宝鏡寺」へと。人形の供養と京人形の振興を目的に建てられ、武者小路実篤の歌碑のある人形塚の出迎えを受け、風花舞うなか歩を進める。

皇室から下賜された人形、歴代の



門跡ゆかりの寺宝の人形を見て回りながら、見たもの、感じた言葉を手帳に書き付ける面々。底冷えのする京都の寺を意外と早く切り上げ、腹が減っては戦はできぬとばかり、錦市場の「元蔵」で気炎を上げる様は句会前にもかかわらずプチ宴会状態。

その後、部屋に戻って早速歳時記と向かい合う方、京都御所へ行く方、はたまたまだ飲み続ける方と、午後からの句会に向け、それぞれのペースとスタンスで17音字に収れんさせていく。

15時からの句会は123句の中より3句選。「3句しか採れないのはきついな」と皆さん、選ばれる気満々。

春雪の描き出したる大文字 小たか  
十二単衣ど一枚も春の色 康子  
雛の間や豆粒ほどの守り犬 ちづる

早春らしい、先ほど見た光景が確かに句に仕上がっている。ここからは武藤主宰の選と講評へと続く。



▲2周年を迎える内容充実の「圓座」

貝は伊勢田螺は近江にぎやかによしこ  
錦市場に行ったのでしよう。はまぐり、シジミの貝類は伊勢、田螺は琵琶湖からきて店先に並んで光っている。「にぎやかに」が春らしくいきいきとしている。

白梅や膨みながら緑なる わこ

京都御所に「青軸」といつて、切ると緑色の枝をした梅があった。花は開くと白いが、何となく青色が残っており、そこを「膨らみながら緑なる」と詠ったところがよかつた。

椿寿忌の狐日和となりけり 直子

今日みために照つたり降つたりの日をさす「狐日和」。椿寿忌は虚子の忌で、時期はもう少しあとだが(4月8日)、虚子は人をだますようなところもあつたようで、なおのこと狐日和がぴたり。

一礼して相席となる春の雪 もも子

どこがいいかわからない句だが、姿形がよく、句の中に含まれる心の有り様が正しく、品がある。特に何も言っていないのに品がある句はなかなか作れない。作った人に品があるから作れる。もも子さんの句ですか(拍手喝采)。白雲の過ぎてほどける柳かな 喜久子  
「奥の細道句抄絵」を描いた小野竹喬



▲とにかく明るく飾らないお人柄で元氣いっぱい武藤主宰

の絵のように、柳の枝の間に雲が動いている様子。今日は動いていなかったが、ちゃんと動くようにする、ここが腕(笑)。動く柳の芽がほどけるような気がするという素敵な句。

偕老の雛の夕べと思ひをり 汀

夫婦が仲むつまじく添い遂げるという意味の「偕老同穴」の同穴を抜いてある。この偕老の「老」が、お雛様も皆さんみために歳をとった感じで、いいなと思っていた(笑)。

クレソンの水温みたる御苑かな 百榮

さらつと言っているがとても上手な句。目立つた言葉を使わずに、水が温んできている御所を力まずに表現している。正統派の俳句。

紅梅のまだ固ければ口噤む 歌子

今年の梅は遅いが、「口噤む」とはなかなか言えない。

百々御所は

みな去にてさぞやひなのご退屈 汀  
言い方がおもしろい。作った人に余裕を感じる。決して「選に入る句を作ろう」とは思っていない(笑)。

句会前には「木戸さん、俺の句採ってね。光ってるからすぐにわかるよ」と言っていた「むさしの句会」中川肇代表だったが、一日目はよりによって代表



# 笑顔礼讃西東



だけが選に入らず「未だかつてない快挙」と自虐的。引き続き行われた懇親会では、各人の自己紹介やカラオケが行われ、中川代表は美声を披露し、その後部屋に戻つてからも男一+女三の麻雀で勝ち、本日の出遅れを巻き返していた。



翌、3日は9時前に旅館を後にし「今熊野観音寺」へ。ここは、平安時代の嵯峨天皇の勅願により弘法大師が開創した寺で、西国第十五番霊場でもある。隣り合う「泉涌寺」は東山三十六峯の一嶺、月輪山の麓にたたずむ寺で、皇室とゆかりがあり、御寺と呼ばれる。各々写真を撮ったり、しばし解説を読んだりと、与えられた時間を目いっぱい使いながら、思い思いの行動をとっている。

その収穫を携えての今日の句会には123句より5句選と、昨日より2句増。さあ、その結果はいかにー。

ときに雨ときにくぐむす葬のみちかよ子  
月輪の山懐に初音かな 喜久子  
初音聞くみでらまるりとなりしかな なおこ

北窓を開けて月輪山を見る 紀子  
雄大な景色と季節の鳥、鶯の句などに点が集まる。そして、武藤主宰の選と講評へ。

白壁に鏡のくろがね冴え返る 舞

「冴え返る」の入った句はいくつか出ていたが、これは白と黒の色の対比がはっきりとあり、いかにも寒そうな感じが伝わってくる。

泉涌寺亀は鳴くのをひかへをり 京子

泉涌寺は御寺という尊い寺なので、さすがの亀もうっかり鳴かずに、敬つて声を控えているという様子がいい。

立子忌やいまだに父を超えられず 肇

中川さんですが、よかったですね、今日は（笑）。3月3日はもちろん雛祭だが、高濱虚子の次女で昭和の大俳人星野立子の忌日でもある。「立子忌や」で大きく切って、下は自分のことをいっている。私はこういう句に弱いので、上手に作ったなーと。

特選  
過去現在未来つらつら椿かな 蘭

過去から始まって大きく切れているという、おもしろい始まり方。時の流れを考えながら椿の花のことを言っているが、並んで数多く咲いている椿という意の「つらつら椿」がうまい。白玉椿では良さがでない。どなたも採らなかつたですね。

先生にうぐむす鳴いてそれつきり 蘭

これも、誰も採らなかつたが、つらつら椿の星野さんの句。特選は、選者の特に好きな句だからそういうもの。いっぱい点が入ったら逆におかしい。「それつきり」の表現はよくあるが、「ほけきよ」などと一声鳴いてそれつきり、その後の静寂観が聞こえてくる。一声でも初音が聞こえてよかつた、という気持ちも表れている。

★その後は帰りの電車を気にしながら、全国各地の自分のフィールドへと戻っていく「圓座」メンバー。「むさしの句会」の東京組はもう一泊し、翌日に仁和寺や嵐山を巡るので、名残惜しいが木戸は京都駅でお別れ。

やんちゃ大将中川代表はじめ、个性的な女性陣とこ二緒した時間。さつきまで飲んでいたかと思えば、句会になれば一心不乱に紙をめくり、選に入ればわあーと歓声をあげ誇らしげに名乗ったりと実に刺激的。寒い京都で、五感で感じとつたものを自分というフィルターを通して世界で一番短い詩として表出させる行為。その入り口から出口までの生産現場に立ち会えたこと、人と交わりながら、悔しがったり喜んだりしながら、結局は自分と真摯に向き合う姿に、改めて人間の愛おしさを感じた旅だった。（木戸敦子）





方代の里  
なかみち短歌大会

(山梨県・甲府市)

山梨県・甲府市出身の望郷の歌人、山崎方代の功績を讃え創設された「方代の里 なかみち短歌大会」の表彰式典が、3月16日、甲府市健康の杜センターにおいて行われました。12回を数える今回は、延べ4122首の作品が寄せられる盛況ぶり。どのような会なのか、お邪魔してまいりました。

主催の甲府市教育委員会教育長、来賓の、方代の常設コーナーのある山梨県文学館学芸課長のご挨拶、選者紹介に続き、各賞の発表にうつります。

■山崎方代のプロフィール

大正3年、右左口村で8人兄弟の末っ子として生まれた「方代」は、長女と5女以外の子どもを亡くした両親が「生き放題、死に放題」という思いで命名したといわれる。15歳頃から作歌を始め、その後、太平洋戦争で右眼を失明。生涯一人で世間から離れて暮らす孤独な生活の中、ありのままの素直な表現で口語体で多くの歌を生み出し、没後、高校の国語の教科書や映画で取り上げられるなど多くの人を魅了し続けている。毎年8月19日の命日には菩提寺の円楽寺で、9月の第1土曜日には生前親交を深めた瑞泉寺(鎌倉市)で方代忌が営まれている。



選者



▲鎌倉市「瑞泉寺」住職の大下一真様 生前の方代と親しみ機関紙「方代研究」を編集  
▲美しい着物姿の今野寿美様 「りとむ」編集人。昭和54年「午後の章」50首で第25回角川短歌賞受賞  
▲歯切れのよい解説の三枝浩樹様 「沃野」代表 山梨県歌人協会会長

◎大会大賞

文部科学大臣賞 一般の部  
新しいワンピース以上の幸せが怖かった  
だけ恋をしただけ 京都府・上村翔  
今野：新調したワンピース以上の幸せとして恐れを抱かせたのは、きつと初めてに近い恋。恋をうまく言い得ている。説明を避け「だけ」で語尾を揃え、ほんぽんと気持ちを示す軽快なリズムがいい。ナイーブな気持ちを率直に表現した歌だが、表現上の技巧も新鮮で、このような歌が方代の短歌大会に選ばれてうれしい。

◎文部科学大臣賞 ジュニアの部

いぬぬ傷夏が来る度考える原爆の無い  
明日がくるのを

山梨県立甲府第一高等学校 依田圭乃子

◎山梨県知事賞

紫陽花の穂にも見える脳を持ち人は  
静い地球を壊す 東京都・野村信廣

◎山梨県教育委員長賞

弓を引きほほに当たる矢つめたくて一  
点集中矢を放つまで

笛吹市立石和中学校 寺本有希

◎特選 三枝浩樹選

◎甲府市長賞  
ブランコの下の小さな闇ゆらし少女は  
ひとり夕空仰ぐ 東京都・森田小夜子  
三枝：詩的な感性で抒情性豊かに、少女の内面に分け入るように詠んでいる。小さな闇が存在しその闇が揺れることを発見した、この把握が見事。

◎甲府市教育長賞

きれいだな夕やけにそまるぼくの町  
しようじ湖線からながめて帰る

甲府市立中道南小学校 眞島伶於

◎特選 大下一真選

台風や地震のたんび思うだが身勝手だ  
けどここはまほろば 山梨県・名取稔  
災害が起こると、そこに住むことを不条理に思うこともある。でもここが自分の故郷、原点であると。「思うだが」の方言に味があつていい。  
浮気など人がこそそそける間を自販機で徹夜している 山梨県・渡辺久男  
会いにくい女性がいる、行きも帰りも徹夜で見張られているというおもしろさ。経験がないのでわからないが(笑)、自販機にご苦労さんという気持ちもある。

◎特選 今野寿美選

はつ夏の大河豊かにためたひて川鶴の  
嘴に獲物光りぬ 愛知県・谷口壽々榮  
大河のゆつたり感と、魚をとらえた瞬間の際やかさが格好のコントラストで表現され、描き方に隠れた技がある。  
ひまわりの花咲く畑の迷路より日傘の  
人のふいに出で来る 山梨県・廣瀬博美  
日傘の人がふつと出てきた、ただそ

れだけのことでも十分に一首を充たす  
光景となる。一瞬気をひいたというこ  
とがよくわかる印象的な描き方。

忘れいし身の丈ほどの幸いを教えられ  
たる方代の歌 神奈川県・藤井房子  
いつの間にか身の丈以上の生活をして  
いた。そういうことを忘れていたとい  
う気付きから、方代の歌にスポットラ  
イトをあてている。

コバルトが口説き始めたセルリアン二人  
で海や空を描こう 青森県・佐々木優  
コバルトブルーとセルリアンブルーのこ  
とで、色はいずれも濃いブルー。硬質のコ  
バルトと優しい響きのセルリアンを、男女  
の比喩として使ったところが秀逸な恋歌。

★遠く北岳を望み、桃と鉄跡の残る畑  
が広がる早春の甲府盆地。市の職員や  
方代会のメンバーがあちこちと準備に回  
り、お昼には三角巾と割烹着姿の奥様  
方が、打ち立て・茹でたての名物ほうと  
うや、手作りのお惣菜を用意してくだ  
さる。次回13回は現在開催中の「第28  
回国民文化祭・やまなし2013」に  
併せて本年10月に開催されるか。優し  
い景色と優  
しい歌に集  
う、優しい  
人たちが関  
わる会は、  
ますます裾  
野を広げて  
いくことだ  
ろう。  
(木戸敦子)



▲親子連れも多く会場は定員一杯



喜怒哀楽書房が今年の十月で十周年を迎えることを記念し、  
今号より特集ページをスタート！  
第一回目は、木戸敦子へのインタビューです。

Muses  
The 10<sup>th</sup>  
anniversary



◎十周年ですね

—最初は何もない状態でしたので、当然お客様もゼロ。ただ、思いだけがありません。そんな、どこの馬の骨ともわからぬ当社に、温かい手を差し伸べてくださったお客さまのおかげで今があります。なぜこの仕事を始めたのか、その原点に戻って振り返りたいと思います。

◎そもそも、なぜこの会社を？

—十一年前、母が亡くなりました。四人兄弟の一番下で唯一の女、一番の理解者であるべきはずが、パーキンソン病とその合併症による痴呆になってからは、太陽のようだった母が母でなくなっていくようで叱咤激励ばかり。多くのものを与えてもらったのに何も返せず、もっと優しくすればよかった、満足して亡くなったのだろうか、と悔いばかりが残りました。遠く北海道は余市から嫁いできて、様々なことがあつたろうに「母」という一面しか知らなかった。もっと多面的な他の面も知りたい、そして母のよすがとなる何かを遺したいと思い、木戸製本所の社長である夫に「母の本を作りたい」と告げました。それからは、母の友人、同級生、親戚、いろんな方に原稿を依頼し、写真を選び…と、火事場のバカ力で原稿依頼から入力、編集、校正…と一人でまよりました。

◎すごい力ですね

—使命とは命を使うと書きますが、その時はまさに「娘」という役割の集大成の時だ、と感じました。自分では

わからない力に動かされたのか、気がつけばパソコンに向かう日々でした。

◎お父さまは愛妻家でしたか

—母、命の父でした。また生まれ変わったも奈那子(母の名前)を見つけると言っていました。母はどうだったのか、ただニコニコしていました。母が脳幹梗塞で倒れ病院に運ばれた夜、地獄の底からかと思うような声で「どうすればいいんだ」と病院の父から電話がありました。その時の自分の対応の未熟さ、無力感もあって、母に代わる何かを遺そうとそのとき既に決めていたのかも知れません。何も返せなかった母の神前に捧げたいという想いもありました。

約三ヶ月後の一〇〇日祭(神道。仏教でいう四十九日)に本が完成。できた！という満足感もありましたが、何よりも父が喜んでくれ、感謝されました。亡くなって数日後、雨降る夕方に実家を訪ねると、父はひとり、母の遺影と向き合っていて「さみしい」と食事をしていました。

辛い日々、その本を抱きしめて眠っていたという事は、のちに耳にしたことです。

◎弊社の「抱きしめていただける本づくり」という理念の礎となるものですね

—「この本を作った本当によかった」と思ってもらえるような本のお手伝いをしたいと思っています。これまでに、本を作ったほどなく亡くなられたお客様がいらっしやいましたが、ご家族の方は「作ってくれて本当によかった」とおっ

しゃっていました。思い出はもちろん心の中にあるのですが、その思い出の手がかりとなる具象のような存在、それがその方の本なのだと思います。

◎本をつくる、想いを遺す…

—「来年こそまとめたたい」「そのうち作りたい」とよくお聞きしますが、そのうちに体調が思わしくなくなり実現が困難になるなど、せつかくの作品が日の目を見なくなることは、本当にもったいないと思います。ご家族がその後、遺稿集をまとめられたとしても、ご本人が目には見えないのが残念でなりません。

ぜひ、ご自身の手で、納得のいく本を作っていたください。ご家族の方も、書き溜めた原稿を捨てるのはしのびないし、かと言って余程の時間と熱意がないと完成させることは難しい。「ご自分の本をご自分で作り、遺す」、それがお子さんやお孫さんへの思いやりだとも感じます。

子どもが親と同じ年頃になったとき、それはまさに宝物の一冊になると思うのです。何事もそうですが、後悔することの多くは、あの人に会っておけばよかった、これを伝えればよかった…と行動しなかったことに対する悔いです。母の本もそんな悔いから生まれたものです。誰もが一度しかない人生、本を媒介にして納得のいく人生のお手伝いができればと思っています。

(インタビュー：菅真理子)



# 投稿作品

※誌面の都合上、投稿作品の掲載は先着300名様までとさせていただきます。何卒ご了承ください。しめきり2013年5月15日(水)まで

## 川柳

- 1 感じいい私に出会う風呂上り  
奥田音野(香川県)
- 2 高軒かく夫と暮らす五十年  
山崎寿美子(富山県)
- 3 深夜便あちらは梅の花見かな  
富樫和子(山形県)
- 4 復興へ八重の櫻の芽が育つ  
尾股清一(福島県)
- 5 自然解凍ゆつくりボクも溶かされる  
田澤宏(新潟県)
- 6 ふんばつて過疎の地まもる老の意地  
諸橋文男(新潟県)
- 7 ご先祖は甘党菓子が二つ減り  
石原岳(群馬県)
- 8 ようやと女になりて初詣  
工藤昌見(山形県)
- 9 山笑う日が待ち遠し着ぶくれて  
南喜美子(千葉県)
- 10 家事皆なし炬燵で昼の酒  
中嶋秀次郎(埼玉県)
- 11 灯油車が暖かそうな曲で来る  
丸山芳夫(東京都)
- 12 ポタ餅を食べる妻は里言葉  
夏井誠治(新潟県)

- 13 今がある今だからこそ今がある  
松田重信(埼玉県)
- 14 赤ちゃんが私の時間食へ尽くす  
岡本恵(茨城県)
- 15 高らかに建国記念日の国旗  
安田翔光(香川県)
- 16 竹の子泥棒がアツチ向いてホイ  
忍正志(兵庫県)
- 17 公園に三人寄れば笑い声  
鈴木義雄(福島県)
- 18 一枚の辞令の語る半世紀  
青木日出男(群馬県)
- 19 春まだき恋の予感がありそう  
松尾健二(千葉県)
- 20 知らぬ間に人が旅立つ世の非情  
藤沢健二(千葉県)
- 21 「春の来ぬ冬はないよ」と励まされ  
細川光子(栃木県)
- 22 老いの字を禁句と決めつ墨を擦る  
坂元正憲(東京都)
- 23 恩師から聞いたひと言利いている  
守屋高雄(岩手県)
- 24 放つとけぬタチです損な性分  
山口千鶴子(東京都)
- 25 突然に若い友来て若返る  
近藤はつみ(福岡県)
- 26 撃沈で生死を超えた海深し  
大江秋月(兵庫県)
- 27 曖昧な私へ梅の小枝接ぐ  
楠瀬美香(高知県)
- 28 寒い中孫が息切らせ走り来る  
原田英一(千葉県)
- 29 めげないで桜咲いたら忘れまじよ  
小山恵美子(大阪府)
- 30 カップルにしようやつきになる周囲  
藤井碩子(山口県)
- 31 無職だが一日終えてほっとする  
松田義登(福岡県)

- 32 好物も絶つて食卓味気ない  
高松秋良(群馬県)
- 33 春風に誘われて逝く冥土ツアー  
稲垣恵子(埼玉県)
- 34 いい方へ取れば明日も出るやる気  
潮田春雄(千葉県)
- 35 窓からのパノラマ空をひとり占め  
井上美恵子(愛媛県)
- 36 空も野も心も茜老いの春  
久本にい地(岡山県)
- 37 伝統を受け継ぐ佐渡の鬼太鼓  
三宅得三(新潟県)
- 38 閻魔から出頭命令まだ来ない  
油谷克己(大阪府)
- 39 お買い得夫だったとほくそ笑む  
会田修(新潟県)
- 40 言えぬことわざとベットに話しかけ  
山崎一嘉(愛媛県)
- 41 こらえきる赤い目の中無念の火  
奥那於子(大阪府)
- 42 娘の幸を願う親子の流し雛  
大岩歌子(岡山県)
- 43 平成が昭和に挑むのど自慢  
近藤富夫(東京都)
- 44 彼岸まで割引きのない渡し舟  
増島淳隆(東京都)
- 45 何をしに二階に来たか降りてみる  
藤井北灯(福岡県)
- 46 衆議院半分にしる食えません  
大川聡(新潟県)
- 47 注意書展望台のここかしこ  
中林恵子(大阪府)

## 俳句

- 48 お師匠さんを招く宴や薄紅梅  
環順子(東京都)
- 49 鯉のぼり命の風を貰ひけり  
小松政雄(長野県)
- 50 咲く梅に紺碧の空ありにけり  
重原昇(新潟県)
- 51 春迎え蠢き出すか何もかも  
水落重式(新潟県)
- 52 海見ゆる晩年ひとり春仕度  
菊池シユン(青森県)
- 53 胎動てふ確かなるもの桃の花  
木村美智穂(埼玉県)
- 54 蒼天の光集めて梅開く  
檜山とり子(東京都)
- 55 三姉妹思いは遙か雛の家  
関原幸子(東京都)
- 56 鴛鴦や君逝きしかば殉死せむ  
山東爺(北海道)
- 57 大日富士へ真向ひ明日の夢  
渡邊碧海(静岡県)
- 58 恋は魔法か晩年の花明り  
井原毬子(東京都)
- 59 ピース持ち寒煙となる伯父は今  
会田とし子(神奈川県)
- 60 子雀の生まれ一茶の家族なり  
関根千恵(埼玉県)
- 61 柿泥棒無き子等の世を疎みをり  
緑川禎男(埼玉県)
- 62 花筏喜怒哀楽を語りをり  
橋本世紀男(東京都)
- 63 憂国の蹶起の朝や梅一輪  
村上克哉(東京都)
- 64 セシウムも湯の香も混じる雪解川  
小野正光(宮城県)
- 65 奥信濃野草分け入り菜種梅雨  
須澤重雄(長野県)
- 66 縄張りのうぐひす既にナルシスト  
川口襄(埼玉県)
- 67 ふとなぞる妻の遺墨を梅二月  
大谷茂(埼玉県)
- 68 試歩楽し紅山茶花や寒椿  
居原田連星(大阪府)



- 69 俳句には定年なしと春の風  
神作汎江(埼玉県)
- 70 辛抱を説くな悴む無業者に  
川崎貴行(熊本県)
- 71 ファシズムと雑踏テロと紅葉かな  
安部哲(新潟県)
- 72 なまはげや泣く子逃げる子畏む子  
土谷敏雄(秋田県)
- 73 託される生き甲斐孫の花の種  
有坂馨園(福島県)
- 74 みぎひだり姿勢直さる「飾」かな  
千代田俳徒(東京都)
- 75 母親の逝きし子供の雛飾る  
山崎吉晴(群馬県)
- 76 ゆつたりとゆつたりと行く春の道  
阿部至(埼玉県)
- 77 観梅の視線はモデル撮影会  
長峰正晴(千葉県)
- 78 雨止んで杖となる傘春隣  
田中美智子(埼玉県)
- 79 立春大吉口にする人しない人  
小島岳青(新潟県)
- 80 菜を間引くまあまあと云ふ老後かな  
清水勝子(神奈川県)
- 81 窓口にアンパンマンの雛かな  
小野寺裕子(宮城県)
- 82 二ん月の我が身の髭を整へり  
近藤薫也(千葉県)
- 83 四捨五入卒寿の春は指呼の間  
野木宗信(奈良県)
- 84 手をなでるだけの見舞や春遅し  
堅田秀子(東京都)
- 85 帰り花一輪宇宙を覗きをり  
市橋千翔(東京都)
- 86 大き濃き月寒林をはなれけり  
夏目満子(東京都)
- 87 赤きもの少し覗かせ春の雪  
山本吉夫(三重県)
- 88 歩くこと辛き歳なり仏の座  
石田義嗣(山梨県)
- 89 雨蛙鳴く啓蟄はまだなれど  
津田吾燈人(高知県)
- 90 古雛夜中に会話してさうな  
武市愛子(大阪府)
- 91 あどけなき石仏群るる母子草  
西川孝子(奈良県)
- 92 山笑ふ明日はきつと日本晴  
炭崎博(滋賀県)
- 93 春星や授かりものは子と俳句  
川崎洋吉(福岡県)
- 94 石仏の並ぶ坂径梅一輪  
佐瀬千恵(神奈川県)
- 95 句帳手に列をなしたる梅見かな  
古谷力(東京都)
- 96 金婚の式は大げさ桜餅  
小形さだ(東京都)
- 97 佳き知らせメールに届く春立つ日  
堀木和子(大阪府)
- 98 ひもすがら山の声聴く探梅行  
佐野和彦(静岡県)
- 99 かじけ猫ネズミの夢へいで来たり  
白戸麻奈(東京都)
- 100 二ん月の今はひたすら充電中  
紺谷睡花(東京都)
- 101 異国から吾子の卒業賑はしき  
福岡悟(東京都)
- 102 土竜の穴埋めし辺りの犬ふぐり  
山本せつ子(鹿児島県)
- 103 下萌の日の射すあたり雀来る  
竹本美美子(新潟県)
- 104 残されし化身の白菜鍋が泣く  
阿部幸子(宮城県)
- 105 大輿をすこせし日々覚るかな  
福原喜恵子(群馬県)
- 106 余生とはいつの日よりや日記買う  
塚田寿子(埼玉県)
- 107 露の臺同窓会の顔久し  
山本紀昭(埼玉県)
- 108 大歌舞伎またひとり逝く春立つ日  
田中昶(鳥取県)
- 109 見覚えの顔の減りゆく初不動  
山崎ゆき(東京都)
- 110 年輪に悲喜のこもこも余寒なほ  
宮崎見昭(埼玉県)
- 111 白鳥の飛び立つ姿いさましき  
原田かずゑ(千葉県)
- 112 バレンタイン肝心要をさり出せず  
佐藤正子(福島県)
- 113 手袋は組んで置けよと妣の声  
鈴木岑夫(千葉県)
- 114 湯浴する猿の細目や春の雪  
三津木俊幸(千葉県)
- 115 耕して連山の影引き寄せる  
北村純一(神奈川県)
- 116 老いてまた咲かせた花よ春の土  
杉村美保子(岩手県)
- 117 復興の益子にさがす陶器雛  
井上静夫(栃木県)
- 118 ふる里が近付いてくる花便り  
森川千英子(千葉県)
- 119 十六夜や孤立死四人四号棟  
加用章勝(千葉県)
- 120 金婚の幸しみじみと福寿草  
今井岩夫(千葉県)
- 121 あたたかし笑顔あふるる孫といて  
古川正栄(千葉県)
- 122 申し訳無さそにけふも雪降るよ  
本間七窪子(山形県)
- 123 冬牡丹光源氏を待つ灯し  
沢田稲花(山形県)
- 124 冬日和のど飴どうぞの医院かな  
大場きよし(宮城県)
- 125 支え木にもたれ老梅香を放つ  
野村牟人(東京都)
- 126 カレンダーの吹雪の中の山頭火  
鈴木与平(宮城県)
- 127 追い風に車雪乗せ走り過ぐ  
副島加代子(宮城県)
- 128 春めけり竹凜として青放つ  
内河邦久(東京都)
- 129 王羲之の筆勢あざやか春一番  
矢野絹枝(東京都)
- 130 地図広げ知床目指す春の旅  
星野三興(新潟県)
- 131 雪の嶺北に蝦夷富士利尻富士  
堀田寿美子(北海道)
- 132 けさの雪日に抱かれて帰りけり  
坂本正夫(千葉県)
- 133 照らされし菜の花明日も幸ならむ  
河合ヤスエ(大阪府)
- 134 加賀白山あらかた晴れて梅の花  
楠原絢子(東京都)
- 135 春近し事の始りさまさまに  
山川幸子(東京都)
- 136 はのはの忌やちちの手植えの椿咲く  
山本直子(大阪府)
- 137 とは言えど何も話さぬほとけのざ  
椋本望生(大阪府)
- 138 伊勢湾の晴れゆく速さ春立ちぬ  
田村秀男(愛知県)
- 139 男気の強き人の忌雪しまく  
小林七重(新潟県)
- 140 微笑みて顔覗かせる露の臺  
杉原明子(静岡県)
- 141 花好きの亡き父想い桜愛で  
大橋絵代(千葉県)
- 142 目の術後雪道財布共にぶれ  
有田裕子(北海道)
- 143 人生を素直に生きて昭和の日  
道給一恵(埼玉県)
- 144 和顔施の功德やしかと桃の花  
木村徳光(埼玉県)



# 投稿作品



- 145 師魂いま磨崖碑す四温かな  
津田忠彦(兵庫県)
- 146 つばめ来る九九の早口登校す  
西口東治(大阪府)
- 147 歳旦や老の手遊び墨書せる  
江見太郎(岡山県)
- 148 句敵の傘寿祝ふや花菜漬  
二瓶邦枝(埼玉県)
- 149 雪降るや鴉に白き鴉あり  
烏冬青(福岡県)
- 150 ポスト立つ終着駅や冬の旅  
山田幸代(兵庫県)
- 151 紅さしていのち灯りぬ紙雛  
増本和子(大阪府)
- 152 白梅の満開といふ静寂かな  
岩村昇(神奈川県)
- 153 車椅子ゆるり歩ます春日和  
早矢仕邦夫(愛知県)
- 154 水晶の光を掬ふ寒の明け  
中西秀雄(東京都)
- 155 春の雪穢れぬまゝに消えにけり  
山岸伊久雄(東京都)
- 156 早春の手押車の長き影  
菅井文男(新潟県)
- 157 梅が枝赤い頬ついで待ち侘びる  
西條公雄(埼玉県)
- 158 露天湯の温顔寄せ合ひ春近し  
神一男(静岡県)
- 159 美術館出でて余韻の夕霞  
小澤みつゑ(静岡県)
- 160 除雪車の唸りで知れる雪の嵩  
湯浅芳郎(岡山県)
- 161 手作りのチヨコ届く日や風光る  
坪田勝秀(鹿児島県)
- 162 亡きひとを余寒のなかにしかと抱く  
北野耕兵(千葉県)
- 163 春耕の妻夜は夜なりに匂いけり  
田島星景子(宮城県)
- 
- 164 ガラス戸を弾きて春の雨確と  
青木ケン子(埼玉県)
- 165 幼き日母手作りの雛あられ  
成田節子(山形県)
- 166 仏桑花忘れず咲きて子の忌日  
高崎登喜子(東京都)
- 167 晩涼の一灯として我が家あり  
阿部徳夫(宮城県)
- 168 苞の落ち真白き芥子の開きゆく  
宇都宮萬里(静岡県)
- 169 助六のセリフさらった春一番  
棚橋麗未(東京都)
- 170 庭石に追伸ほどの雪ふれり  
清まさじ(静岡県)
- 171 風花や鉄塔が建ち鳶職人  
延原令岱(岡山県)
- 172 梅の花牡丹雪後輝かし  
五味田幸夫(神奈川県)
- 173 春没日わが影伸びし大砂丘  
呂橋節夫(兵庫県)
- 174 座敷童出でよ今宵は鬼やらひ  
鈴木智子(千葉県)
- 175 白樺の雪にまぎれもなく立てり  
小西四郎(東京都)
- 176 待春や懇ろに拭く車椅子  
大阿久雅子(東京都)
- 177 鈴冴える夜ふけの徘徊孕婦  
高橋トミ子(山形県)
- 178 青き影庭に置きたる寒の月  
安藤まこと(岩手県)
- 179 つくばいに辿り着きたる冬の蝶  
鈴木蝶次(宮城県)
- 180 天地人大河流れて鳥雲に  
大橋恒次(新潟県)
- 181 Gパンの破れしひざに春一番  
岩永登茂子(大阪府)
- 182 つれづれに本繻とけば兼好忌  
勝田久美(大阪府)
- 
- 183 余生とはもつたいなやと雛飾る  
石井美智子(埼玉県)
- 184 雪溶けぬ運動場の狭さかな  
布目雅之(埼玉県)
- 185 招福の名の盆梅を玄関に  
中村慶子(滋賀県)
- 186 蘇峰堂臥雲の梅の一分咲き  
星一子(神奈川県)
- 187 路地裏の占い人や肩に雪  
松尾らん(東京都)
- 188 童心に返つて桃の節句なり  
宇田川正雄(埼玉県)
- 189 春立つや気ままな旅の夢を見る  
関子利明(兵庫県)
- 190 花三極几帳面なる人の礼  
久世しずか(埼玉県)
- 191 立春の水音にある茜富士  
寺岡文生(静岡県)
- 192 菜の花を漬けて近江の人となり  
芋木匡子(滋賀県)
- 193 古稀米寿踊り軽さも小正月  
森俊彦(神奈川県)
- 194 宿題を忘れて来たる葱坊主  
吉村充治(埼玉県)
- 195 ふり向けば今果つるいろ冬茜  
高瀬秀嘉(静岡県)
- 196 気がつけば百まで三つ臙月  
山本善輔(兵庫県)
- 197 笑み交し髪撫でながら雛飾る  
磯部力(新潟県)
- 198 雪原をさすらひ餌を欲る北狐  
梶鴻風(北海道)
- 199 老いふかく独白多き玉子酒  
浦橋渴雪(兵庫県)
- 200 猫に声かけて振られるげげ田道  
石崎ひろ美(神奈川県)
- 201 吹雪あり雪をかつぎて家人る  
安木沢修風(新潟県)
- 
- 202 裏木戸の虫音ぞ消しつ来訪者  
小林敏宏(長野県)
- 203 成人の日なり農業継ぐ気なり  
関口修一(群馬県)
- 204 早春の光りの襷や瀬戸の海  
中田文子(大阪府)
- 205 春潮の金波銀波や遊漁船  
油谷郷史(兵庫県)
- 206 鞆を漕ぐちちははを憶ふとき  
中岡昌太(神奈川県)
- 207 百才の母を労う新茶汲む  
大久保アヤ子(東京都)
- 208 生きぬいた父の足跡蜃気楼  
大塚徳子(埼玉県)
- 209 雪原を走る少年追ふ少年  
小山たけし(埼玉県)
- 210 鴉ざわめく雪野に置置かれ  
辻升人(東京都)
- 211 飛び梅のたよりに庭の梅匂ふ  
池本勇(奈良県)
- 212 紅梅の上に浮べて雲白し  
中嶋清子(佐賀県)
- 213 春寒し猫背のままに妻帰る  
堀井酔人(茨城県)
- 214 人々の声にぎやくかく春の雪  
鈴木みえ(長野県)
- 215 被災地の子等に幸あれ福は内  
藤田三四郎(群馬県)
- 216 過ぎ去つて煉瓦色づく秋時雨  
木下精(大阪府)
- 217 白魚の透けたるままに影もてり  
新谷雄彦(広島県)
- 218 菜の花の満ちて明るき常の道  
駒場京子(神奈川県)
- 219 落椿肉やはらかによりそへる  
中高純子(新潟県)
- 220 怠惰なほ怠惰を誘ふ春の風邪  
伊藤玉枝(北海道)

- 221 投函すポストの上の春の雪  
佐藤信(神奈川県)
- 222 大川を遡る曳き船風光る  
倉田淑子(千葉県)
- 223 亀鳴くや悟りし生の長からむ  
齊藤安弘(神奈川県)
- 224 爺と婆雪の隙間で飯を食ふ  
白岩賢次(福島県)
- 225 島めぐり口笛たんぽぽ日和かな  
井上氣海(広島県)
- 226 平成の弁慶逝けり冬の雷  
寺内侘(埼玉県)
- 227 節分の護摩に家運を祈りけり  
田中恵美子(山形県)
- 228 突堤の果に燈台鯨群来  
高杉杜詩花(北海道)
- 229 終の家になるのか昇るオリオン座  
中山日出子(大阪府)
- 230 春兆す水に膨らみありにけり  
藤田照代(岡山県)
- 231 たずねゆく古き仏を春の奈良  
須田洋子(埼玉県)
- 232 山里の月と語らふ掛大根  
浅野信廣(宮城県)
- 233 懐メロを口ずさむ午後うらけし  
貝沼とし子(愛知県)
- 234 一笛に斉ふ二月の能舞台  
原田麦吹(埼玉県)
- 235 笹子鳴く母は全身耳とせし  
竹澤茂子(大阪府)
- 236 鴛鴦や天命ひかり星二つ  
澤雅子(大阪府)
- 237 ひな祭りはしやく子らいるうちが華  
高橋まさ子(宮城県)
- 238 胸躍る吟行日和雨水晴れ  
田野井一夫(栃木県)
- 239 恋は闇ただ一筋の枯野かな  
上村元義(神奈川県)

- 240 水仙の香りに浮かぶ友の笑顔  
針生清(千葉県)
- 241 初蝶や隅田の岸を案内す  
福田和子(東京都)
- 242 啓蟄や歯茎の麻酔まだ抜けず  
今井勝子(新潟県)
- 243 白梅やわが来し方を振り返り  
松嶋光秋(東京都)
- 244 蒼空を滑るが如く燕来る  
橋本良子(埼玉県)
- 245 潮の満ち春日ふくらむ運河かな  
服部八重子(東京都)
- 246 埋没を語る鳥居や楠若葉  
中野勝子(鹿児島県)
- 247 春疾風友ありてこそ化粧する  
今井節子(千葉県)
- 248 煮凝りの珍珠と称す齢かな  
植野無人(兵庫県)
- 249 古雛試行錯誤の飾りかな  
小林紀美子(東京都)
- 250 大根干す家路にため二本下げ  
関忠恕(静岡県)
- 251 能登めぐる春の旅路や匂の味  
山田富朗(埼玉県)
- 252 満開の椿見上げて笑みし妻  
磯山陽吉(東京都)
- 253 湯豆腐と酒とかつての上司かな  
仁藤ひろし(埼玉県)
- 254 あかあかと桃の剪定春立つ日  
神野弘(岡山県)
- 255 春めきて浮力のもどる川の鯉  
片山茂子(埼玉県)
- 256 雛の市三百年かな五日市  
田野倉訓郎(東京都)
- 257 雪暮れや問えば舌訛む媪かな  
藤井春三(埼玉県)
- 258 林檎赤し吾子の享年二十四  
勢川直美(大阪府)

## 短歌

- 259 帰り道梅一輪を友にして  
青山知子(滋賀県)
- 260 筆ペンを使い一文字ひともじをねん  
ごろに書く傘寿の賀状  
椎忠夫(神奈川県)
- 261 老母にそのままの私の顔を刺る八十  
四歳雪の降る朝 佐々木都(長野県)
- 262 来信の宛名は墨書「英」の文字「笑」と  
見えてほのぼのたのし  
井川英子(大阪府)
- 263 諸国の若人集いてのど自慢世界が愛  
でる日本語の歌詞  
山本勝美(滋賀県)
- 264 土の中寒さこらえて芽を吹きぬ葉ざ  
まにのぞかせふきのとうみゆ  
大鳥居牧子(東京都)
- 265 本箱で見つけしメモは山野草訪ね歩  
きし夫の道のり 高橋邦子(高知県)
- 266 庶民にも平等なのは空気だけ今不平  
等いまの福島 黒澤正行(福島県)
- 267 うめざわさんはホワイトスノウだわ  
わたしだつて手をつけれない  
梅澤鳳舞(埼玉県)
- 268 どうしても僻地にゆくと息子告  
げることなし白き山々  
篠原三郎(静岡県)
- 269 再建に心燃やして奮い立ちし今年の  
冬は寒からなくに 渡邊清(宮城県)
- 270 歌舞伎界御体三人次々と若き獅子等  
のこんびら芝居 佐伯セツ子(香川県)
- 271 春の水すくわんとしてみぎざわの吾  
子はまるごとひかりの器  
北岡晃(兵庫県)
- 272 雪降ればもろ人幼に還るらし静もる  
小路に雪だるま佇つ  
萬濃その子(神奈川県)

- 273 確りと立てる限りは大丈夫百才の山  
じつと見据えり 山本敏順(長野県)
- 274 天衣無縫の妻なれど義弟に素晴らし  
き嫁授けく 今井忠一(東京都)
- 275 飲み唄ひ踊りスナック心地よし生き  
る喜びぶつふつと湧く  
小暮昭司(群馬県)
- 276 孫娘等とケーブルに乗らず登りたり  
御嶽神社に無事初詣  
浜野タミ(東京都)
- 277 「おかあさん」一日に何度も「おかあ  
さん」呼ばれてみたい優しい響き  
阿部澄江(宮城県)
- 278 初夢は車の免許取得する九十の我れ  
夢に喜ぶ 石原千江子(群馬県)
- 279 湯たんぽを赤き袋に包みつ、夫の安  
眠ねがう正月 渡辺美津子(静岡県)
- 280 天然のダムと謂はるる山毛櫨の森「美  
人林」の雪間の神秘  
大竹憲弥(新潟県)
- 281 夕羽振り帰りござりし夫と娘よ虚空  
蔵菩薩にただ祈りをり  
三澤雅子(岡山県)
- 282 如月の川の水面の白鳥の浮かぶ姿に  
ひとり慰む 百花清(埼玉県)
- 283 かけはしのチョコレートはほろにがく  
男の胸に風が走りぬ  
渡辺健(山梨県)
- 284 両親に豊かにしとやかに育てられ嫁  
ぎて先はおのが責任と  
高須孝(愛知県)
- 285 春おぼろ自死せし兄の影法師そこにい  
るよな闇がある 寒川靖子(香川県)
- 286 命はも器械づけなる病室に看護も地  
獄明けの凍屋 佐伯はる(奈良県)
- 287 連れ合いを一人で看護る八十の姉か  
くる言の葉氷雨降りしく  
今井温子(奈良県)



- 288 妻早朝サツサ・ソツクサ美容院頭天フ  
サフサ・マジマジご覧を  
西山悌三郎(高知県)
- 289 江戸川の土手の上から見る冠雪富士  
の雄姿もビルの谷間に  
田中迪子(東京都)
- 290 花店にて捨てられ苗を頂きて見事に  
咲きし胡蝶蘭なり  
浅沼正子(神奈川県)
- 291 駒草の小さな花の咲く山路これが最  
後か思いいろいろ 内田茂(東京都)
- 292 命日の姑に供える京最中「お好きで  
したね、薄茶もどつぞ」  
山内寿子(京都府)
- 293 できるなら自家発電し蓄電し要る分  
だけを使うが夢よ  
安達一葉(北海道)
- 294 山里にとり残されし脇往還いにしえ  
の旅人の哀歎偲ばる  
長野光康(神奈川県)
- 295 花一輪歌手はおのおの胸に寄せ復興  
ソング聞くほど哀し  
土屋喜雄(山梨県)
- 296 定食に出た菜の花入りの汁「にくい  
ね」とつぶやくエトランゼ  
濱崎祥子(鹿児島県)
- 297 銃口を向けたる君の瞳には核持たぬ  
国の民が斃れる 安部龍太(山梨県)
- 298 弧の中に武尊を据えて虹は立つ連な  
る七座の尾根は見えぬぞ  
桑原謙一(群馬県)
- 299 次ぎ次ぎと五種類の桜の咲くといふ  
先生のお庭今も恋ひ居り  
木暮珣子(群馬県)
- 300 上皇の火葬塚ある島へ来て波の音き  
く私も波で  
久保和友(滋賀県)

※前号投稿作品210漁れりは、正しくは漁れりでした。お詫びして訂正いたします。

## 2月号の 心に残った作品

「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんのお返をお寄せ頂きありがとうございました！その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。



佐藤正子様

### 《大賞》 4 紅染むりんご除染の日々を胸に秘む

佐藤正子(福島県)

・胸に秘むが原発事故に対する「怒り」「憎しみ」「悲しさ」の想いであろう。福島は私の生家、親類、知人友人が多い。汚染水が流れ、飲料水は機械、薬品で安全除染して供給している。人間の後世に問題が残る。菅井文男(新潟県)・色づくリンゴ、しかし放射能禍はどうか。稔りの秋によるこべない心情が。安藤まこと(山手県)・りんごがおおいしそうに色づいてきた。目には見えない放射能の除染の辛い日々は忘れられない。竹澤茂子(大阪府)・りんごの切なさ強さが伝わってきます。渡辺宜(滋賀県)・胸が痛みます。川島久子(高知県)ほか

【目句自解】  
東日本大震災と原発事故以来、福島県民は実に腹だたしい歳月を生きておられます。農業者は殊更に過酷な体験を

しました。「除染」の名で果樹は真っ白になるまで皮を剥かれ、高圧洗浄機の水を受けました。人間で云えば瀕死の状態のりんごの樹は、それでも花をつけ実らせ、秋には除染の苦しみなどなかったように頬を紅に染めた。そのいじらしさ逞しさに感動です。それでも「福島」の名で買いたたかれるりんごを私は詠まねばならない。

### 《俳句》

#### 90 百姓の顔をならべて冬至風呂

寺岡文生(静岡県)

・皆さん、いいお顔でいい湯でしょうね。炭崎博(滋賀県)・一年の汗を流しに頭にタオルを乗せて湯気の中のはころぶ顔が浮ぶ。阿部幸子(宮城県)・日焼け顔が並ぶとたのもししい面白い。北村純一(神奈川県)・銭湯はすっかり影をひそめたが、日帰り温泉がいっぱいでした。大粒の袖を浮かべてそこに日焼けした百姓の笑顔も浮かぶ、癒される句。大橋恒次(新潟県)・堂々とした句でかないませんね 稲葉民雄(千葉県)・生きざまが見える 中野博夫(埼玉県)・逞しい顔が気持良さそうに湯ぶねに並ぶ日常の小さな幸せを感じる。大内泰子(東京都)

### 《短歌》

#### 230 華やいで咲くこともなく枇杷の木は 小雪の季に白き花持つ

桑原謙一(群馬県)

・毎日の散歩コースに一本だけ植えて有るピワ、句の通りでありがとう。今日も眺めて思い出します。佐伯セツ子(香川県)・楚々とした枇杷の花に我が人生を重ねて 佐伯はる(奈良県)・落着い

た詠みぶりに魅かれた。こまかく観察している所も良いと思う。木暮珣子(群馬県)

### 《川柳》

#### 270 捨てた夢拾い女を生き直す

小山恵美子(大阪府)

・夢はすてずに追いかけることで楽しいものです。小野正光(宮城県)・やり直そうとする前向きさが良い。共感できる。細川光子(栃木県)・本当ですね。私もそう思います。近藤はつみ(福岡県)・女の哀感がある。油谷克己(大阪府)

### 《他にも》

#### 7 しなやかにしたたかに生き山眠る

稲垣恵子(埼玉県)

#### 23 年毎に未知の老あり年明くる

井原稔子(東京都)

#### 87 もう来ないあの筆痕の年賀状

辻升人(東京都)

#### 126 表札に嫁の名加ふ桃の花

遠藤きん子(神奈川県)

#### 225 継母逝きて甘えたあの日の幼き日あ なたの娘で幸せでした

田中迪子(東京都)

#### 262 学校でいねむり塾で出す本気

藤井碩子(山口県)

#### 273 雪つりの松は緑の蛇の目傘

奥那於子(大阪府)

#### 283 ひとつ鍋たべて無防備恐進む

山崎一嘉(愛媛県)

#### 284 なきゃさみしければ腹立つゴミ拾い

川沼幸江(新潟県)

※今後ふるってご投稿をお願いいたします！

前回のアンケート

Q:「春」と言って思い出す文学作品は？  
紙幅の関係上、すべてのお答えを掲載できません  
こととお詫び  
申し上げます。



★枕草子

・春はあけぼの

山本勝美(滋賀県)、井原毬子(東京都)、橋本世紀男(東京都)、土谷敏雄(秋田県)他

・少年時の頭に少しあります

千代田栄次(東京都)  
小学三年の孫がすらすらと諳んじているのにびっくり。

★春琴抄

・季節の「春」とは無関係ながら

大阿久雅子(東京都)  
今「福島民報」に清少納言が連載されているから。 白岩賢次(福島県)他

安田翔光(香川県)  
谷崎潤一郎の耽美主義が好きです。  
古谷力(東京都)  
一凶な恋慕、ひたむきなタッチでしたネ。  
松尾健二(千葉県)  
高校生の時読んだ本です。

★島崎藤村の「春」

大橋絵代(千葉県)他  
・新入生・新入社員、通勤電車の顔ぶれも変り新鮮さがある。

石原岳(群馬県)

・島崎藤村詩集「春」初恋「私の文学への原点です。」 小暮昭司(群馬県)  
・幼い時に読んだのですが、何が「春」と思えるのかわからなかった作品でした。  
小黒深雪(新潟県)他

★細雪

・京都の桜は綺麗な想い出

居原田連星(大阪府)  
・映画のラストシーンの桜満開の花吹雪が印象的でした 阿部澄江(宮城県)  
・華麗な春が想像できます。

・ストーリー性に

棚橋麗未(東京都)

★千曲川旅情の歌

米山豊(神奈川県)他  
・この小諸市は私のふるりの隣なのでふるりを偲ぶ時には自然と口ずさんでしまいます。  
山崎吉晴(群馬県)

・中学校で「小諸なる古城のほとり」を暗記させられ、今でも忘れないで覚えていました。 校庭にさくらが舞っていました。  
高崎登喜子(東京都)他

★伊豆の踊子

・雪国の美しい話、青春が蘇る。

鈴木与平(宮城県)  
・春の伊豆の影を思い出した  
佐伯はる(奈良県)  
・高校生の頃、この作品を読んで伊豆に出かけたことがあります。

★草枕

長野光康(神奈川県)他  
・中学に入った時先輩からもらった本。なぜか大人になった気がした。

長峰正晴(千葉県)他

★春と修羅

・短編集だが面白い。

浦橋克行(兵庫県)他

★おらが春

・不幸な身の上にもかかわらず暖かい個性がにじみでていました。

関根千恵(埼玉県)

★若い人・青い山脈

小野正光(宮城県)他  
・一茶の書  
野木宗信(奈良県)  
・石坂洋次郎の「青い山脈」我が青春  
布目雅之(埼玉県)

★春暁

・うきうきとした春の光景だったように思うのですが…。 柳澤京子(宮城県)

・孟浩然の「春暁」、蘇軾の「春夜」  
村上克哉(東京都)

・「春暁」孟浩然、「早発白帝城」李白、「絶句」杜甫、「江南春」杜牧 等です。  
大谷茂(埼玉県)  
・孟浩然の「春暁」  
三津木俊幸(千葉県)

★放浪記

・再読は数えきれない程なのに、いつもストーリーの向うに光を感じ「春が来る」と思わせてくれる作品。

高橋トミ子(山形県)他



★湯島の白梅

・「湯島の白梅」「江姫乱国の華上」

高須孝(愛知県)他

★桜の園

福原喜恵子(群馬県)、倉岡依世(東京都)、竹澤茂子(大阪府)

★春の雪

・映画「春の雪」高松の栗林公園を撮影時々行つて居るので嬉しかったです。

佐伯セツ子(香川県)

★土

・「土」と言う芝居を見た事を思い出しました。  
大鳥居牧子(東京都)他

★万葉集

・「あかねさす はるすぎて あをによし」春秋をとわず好き。  
有坂馨園(福島県)

・万葉集の中の春を詠ったもの。  
細川光子(栃木県)他

★雪国

井口桂山(新潟県)、村岡盛栄(群馬県)

★二十四の瞳

奥田音野(香川県)、久本にい地(岡山県)





# A Q U E S T I O N N A I R E



## ★小島の春

土屋喜雄(山梨県)、森俊彦(神奈川県)、佐々木都(長野県)

## ★童謡

童謡を思い出します。詩も曲も最高です。津田忠彦(兵庫県)

春の小川等、春の歌です。

道給一恵(埼玉県)、青木日出男

(群馬県)

童謡歌「春」 西口東治(大阪府)

「おぼろ月夜」唱歌詩 自分の生れ育った土地と自分でイメージしており詩と同じ風景が自宅の裏に広がっていた。菅井文男(新潟県)

「隅田川」の「春のうららの…」の歌です。鈴木智子(千葉県)

文学作品よりも童謡に歌われている「春」に好きなものが多いです。鈴木蝶次(宮城県)

## ★蕪村の俳句

春の海ひねもすのたりのたりかな

藤井碩子(山口県)、中西秀雄(東京都)、渡辺健(山梨県)、小笠原紗恵子(神奈川県)

「春の海終日のたりのたりかな」菜の花や月は東に日は西に」俳句を習う前から自然に頭に残っている句です。石崎ひろ美(神奈川県)

なんといつても「春三部」圧巻 小島岳青(新潟県)

## ★西行の歌

「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」

渡辺嘉幸(東京都)

春は桜。桜は西行さんの歌。近くの河内弘川寺で「願わくは花の下にて春死なむその如月の望月のころ」逝かれました。奥那於子(大阪府)他

## ★その他

「陽のあたる坂道」石坂洋次郎

松尾正一(岩手県)

太宰治「津軽」 菊池シユン(青森県)

漢詩、江南の春を詠んだ「尋胡隱君」を口遊む。木村美智穂(埼玉県)

「春ちかき冬」 山崎寿美子(富山県)

水仙に勢いありて気をもらふ

尾股清一(福島県)

中学(旧制)に入った春四月、初めて読んだ島崎藤村の「夜明け」

徒然草 神作洸江(埼玉県)

シエリー『Ode to the west wind』 田澤宏(新潟県)

「春の鳥」国木田独歩 短編だけと忘れられないいい作品。梅澤鳳舞(埼玉県)

森万紀子の「雪女」もう春です。雪女

来そうな寒さは終わったと思うから。工藤昌見(山形県)



虚子の「咲き満ちてこぼるる花もなかりけり」見事な一瞬。津田吾燈人(高知県)

イソップのお話(冬と春) 田中美智子(埼玉県)

「春の潮」伊藤左千夫 近藤薫也(千葉県)

かつて自分で創ろうとした「青春物語」、中途半端でそのままになった作品。但し文学作品? 川崎洋吉(福岡県)

大草原の小さな町 岡本恵(茨城県)

「一握の砂」 石田義岡(山梨県)

五木寛之「青春の門」

合格、入学祝いに 村上春樹

「坊っちゃん」 佐瀬千恵(神奈川県)

八重の桜 福岡悟(東京都)

三島由紀夫「豊饒の海」 阿部幸子(宮城県)

サトウハチロー 原田かずゑ(千葉県)

「最も遠い銀河」(春)白川道 杉村美保子(岩手県)

春は馬車に乗って 加用章勝(千葉県)

ツルゲーネフ「初恋」 矢野絹枝(東京都)

三好達治「測量船」(春の岬旅のをなりのかもめどり浮きつつ遠くなりにけるかも) 楠原絢子(東京都)

源氏物語 小山恵美子(大阪府)

ヘルマン・ヘッセの「デミアン」思春期から青春への時期に引きこまれて読みました。増本和子(大阪府)

小林一茶 早矢仕邦夫(愛知県)

三島由紀夫の処女作「花ざかりの森」初版本を今でも大切にしております。延原令岱(岡山県)

「荒城の月」春高樓の…(文学作品ではないかな?) 山岸伊久雄(東京都)

わが輩は猫である 小澤みつゑ(静岡県)

川端康成「掌の小説」 北野耕兵(千葉県)

風とともに去りぬ 成田節子(山形県)

「春の一日」です。清まさじ(静岡県)

ロバート・ブローニングの「春の朝」上田敏の訳にあると思うが、又ムツゴロ

が北海道の春をおいしく書いていると思う。安藤まこと(岩手県)

暴走老人を自認、元氣印の著者に肖り「太陽の季節」 大橋恒次(新潟県)

ノルウェイの森(上下)去年春に読んだ。岩永登茂子(大阪府)

春眠不觉晓 松尾らん(東京都)

奥の細道「行く春や…」が印象的 吉村充治(埼玉県)、福田和子(東京都)

真鳥武先生の歌集「清水谷」「一日といひ得ず行きの道に見てかへりに見れば桜ひらきぬ」春はこの一首。

相馬竹浪(新潟県)

春は鳥の囀る季節キツキツと鳴く声に 村上春樹「ねじまき鳥1・2・3」

今井温子(奈良県)

「沈黙の春」レイチエル・カーソン 著梶鴻風(北海道)



- ・精神的な春、「青春の門」を若い時に感銘した 中村和弘(愛知県)
- ・「斜陽」太宰治 橋本まこと(栃木県)
- ・アイザック・ウォルトン「釣魚大全」 新谷雄彦(広島県)
- ・日直の時坪井栄の「岸うつ波」に読みふけり大切な草靴を盗まれて帰宅に困った事を思い出します。これは戦後の物の不自由な時代のことです。 大岩歌子(岡山県)
- ・「早春賦」 池本勇(大阪府)
- ・「季節風・春」重松清 中高純子(新潟県)
- ・花村萬月「惜春」 齊藤安弘(神奈川県)
- ・「女占い12ヶ月」『春告鳥』(杉本章子)が思い出される 近藤富夫(東京都)
- ・和歌と俳句を「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」西行「花あれば西行の日をおもふべし」角川源義 中山日出子(大阪府)
- ・堀辰雄「信濃路」 請関邦俊(埼玉県)
- ・草野心平の詩「富士山」作品第肆「川面に春の光はまぶしくあふれ…」 桑原謙一(群馬県)
- ・「浅い眠り」 木暮珣子(群馬県)
- ・耳無芳一の話 小泉八雲 橋本良子(埼玉県)
- ・坂口安吾「満開の桜の木の下で」 久保和友(滋賀県)
- ・上田敏訳詩「海潮音」中学一年英語で原詩を習い「春」パウル・バルシェ、「わすれなぐさ」ウィリアム・アレント「For get me not」 関忠恕(静岡県)
- ・梶井基次郎「桜の樹の下には」 新井賢(埼玉県)
- ・先師小澤克己の句集「花狩女」と爽樹

代表小山徳夫氏の「小春の山河」

山田富朗(埼玉県)

吉川英治「三国志」十二才の春休みに読んで以来、なぜか春が来ると読み直す。 神野弘(岡山県)

ペールギュントの春の朝の曲に感動しこんな句を詠んだ。「朝の珈琲ペールギュントの曲麗ら」 仁藤ひろじ(埼玉県)

「abさん」黒田夏子

青山知子(滋賀県)

若菜集

木村舩(山形県)

菜の花の沖

有田俊一(埼玉県)

いちばつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春行かんとす 滝田照雄(埼玉県)

大地

津布久信雄(東京都)

春よこい

濱田イサオ(福岡県)

ヴィバルディの「四季」とかベートーベンのピアノ曲「春」がパッと浮びました。 鈴木章(新潟県)

飯田龍太先生の「白梅のあと紅梅の深空あり」 吉澤昌美(長野県)

童謡では沢山春の歌がありますね。「赤毛のアン」とか「草原の小さな家」ターニン・ニューダーの絵本とか。自然が沢山な本が浮びます。 富樫和子(山形県)

など



(挿絵 須澤重雄)

## 新潟ぶらり

### ★白根グレイプガーデン

南区までいちご狩りに行くことにした。ハウスは暖かいだろうと服装も軽いものにしていそいそと出発。雪は消え、少し春を感じさせる光である。

南区は新潟平野のほぼ中央に位置し、区の東側には信濃川が、区の中央には中ノ口川が流れる緑豊かな田園地域である。フルーツ王国ともいわれており、観光農園も多い。白根グレイプガーデンも、そのひとつだ。

園に到着すると、ハウス近くの「夢のいちご狩り」という看板が目に入った。中はどんなふうになっているのだろう。受付で鉢と籠をお借りし、ハウスへ向かう。扉をあけると、あたたかい空気がいちごの匂いを連れてきた。

数組の家族連れが、「ここに赤いのがある!」「こっちにもある!」と盛り上がり上がっている。私もどれどれと探し始めた。春の光をうけてキラキラしているいちご——平成八年に生まれた新潟ブランドいちご・越後姫だ。入口付近で夢中になっていると、「入口よりも奥の方にいいのがありますよ」と係の方のアドバイス。あつという間にバック一つ分になった。持ち帰り用に包んでもらいお土産にする。なんだかとても満たされた気持ちになった。

グレイプガーデンとの名のとおり、こ



■フルーツランド 白根グレイプガーデン  
住所 〒950-1407 新潟市南区鷺ノ木新田573  
電話 025-362-5535  
いちご狩り 1月～6月

こではぶどう狩りもできる。他に、季節によって、もも、いちじく、なし等々十数種の果物の収穫が楽しめる。一年中果物狩りができるのだ。これは、社長・笠原氏の積年の夢であった。果樹農家の三代目を継いだ笠原氏は、元々グレイプガーデンとして七月から十一月までの半年間の開園であったのを、いちご園をつくることで一年中楽しめる観光農園にしたのだ。様々な果物狩りの他、園内で収穫した果物を素材にしたジェラート(氷菓)も人気が高い。農業と観光を融合させた、フルーツランド。看板の「夢のいちご狩り」とは、そういうことだったのだ。原点だったのだ。

帰宅後、歳時記を繰ると、いちご狩りは夏の季語だった。これから、夏に向けて光が増していく。あたたかくつよい太陽の光が、実を育てていく。

耳元に太陽の私語 堀内薫 (菅真理子)



●お客様の『リレーエッセイ』

## 八丈島の畑から

高橋典之

(東京都・八丈島)

毎日、毎日、ひたすら畑に出て鋤を振るっている。無農薬無化学肥料はもちろん、草草や、その根が積み重なって、次第に豊かな畑の自然に還っていく。その中で大地のエネルギーを持った健康な野菜が育つという自然農に憧れて、肥料が要らなくなるのをまだかまだかと待っているうちに、一面のドクダミとシダに覆われてしまった、という笑えない話。確かに自然に還ったのだが、それは、この土地が山半分を崩して造成した畑で、元々は小さな川が流れる谷間の沢地であった、その自然に還ったということだった。湿地の自然を、今一度畑の姿に変えようと、毎日鋤や鋸、唐鋤を手に木や竹を切り、草を刈っては耕している。七〇〇坪はあるので、目を遮る木を払い、上が露わになると、こんなに広がったのか、と感嘆する。

湿地の過剰な水分や、はびこり過ぎたドクダミやシダの根は、畑作に全くそぐわない。降水量が屋久島に続いて国内第二位の八丈島では、腐植のスピードが速く、病原菌の巣になってしまう。表面の土は腐植でベトベトで、酸素の流通も妨げられる。そのベトベトの梅雨が終わると、強烈な日差しがやって来て、今度は二十日も雨が降らず、これが二回の夏もあるのだ、地面が今度はカチカチになって乾いてしま、雑草までも枯れ始める。また、季節の変わり目は、曇る日も多く、外海ゆえの半端でない二十五メートルもの風が吹くので、作物にとっては、相当に過酷な環境である。

ここでは不耕起は諦めなければならない。沢地を畑の状態に変化させ続けなければならない。雨のない季節に天地返しか、せめて鋤だけでも入れて、土を乾かし、酸素を含ませる必要がある。それと八丈島の土は概して火山灰地なので、土がとて痩せている。ここは造成地だからなおさらである。腐植も考えに入れて、よく発酵処理した堆肥を入れるしかない。

今、木や草を払った畑には、アシタバを移植している。アシタバはセリ科の多年草で、湿地にも向き、日照不足でも育つので、密植さえしなければ、無農薬はもちろん有機肥料も少なくて済むので、自然な栽培ができる。密植しないということは商業ベースには乗せられないことを意味する。しかし、本当に、太陽の恵みを十分に得た、健康な野菜は、人間の肉体や、魂にとっても大切なものと考えられる。生産はささやかでも、何種類かの野菜で、人と人との尊いつながりが出来ていくことを目標としたいと、夫婦で話している。

日々拓く畑に立てば夢一路

山椒の芽吹き愛でつつ妻戀う



## 滋味しみじみ

### ホウトウ



三好あきを様 (埼玉県・北本市)

傘寿を過ぎ、五欲の衰えは目に余るようである。しかし、老いの楽しみは、やはり食べることにありそうだ。

草間時彦氏は食物の俳句で有名である。「煮てくれし冬至南瓜や納め句座」晩年の作と思う。外に土用鰻、鱧、鮎と食通だ。また釜揚げうどん、なずな粥、蒸鮎、草の餅、さうめん等と懐かしい季語も。「秋鯖や上司罵るために酔ふ」というのもあった。

ところで私は狭心症により入院の前科もあるが、山梨県の「ホウトウ」が大好きだ。山ガールの娘のお陰で連れ出してもらっては、甲州ホウトウとなる。店によっては「少し時間をいただきます」と貼紙があるが。

ホウトウは、やや幅広うどんに種々の野菜が入っている。健康面にも良さそうである。近頃、当地にもホウトウのメニューの店を見つけた。

放蕩子ホウトウを吹く余寒かな あきを

●食に関するミニエッセイ「滋味しみじみ」の原稿を募集しています。400～500字の原稿をP16 下記の宛先に封書かメールにてお送りください。勝手ながら採用の可否については、弊社に一任させていただきます。おいしいお話、大歓迎です!!

## 10月10日に10周年

本年10月10日に10周年を迎えるにあたり、本4月号より特集ページを設けました(5頁)。奥ゆかしい新潟女ゆえ、自分たちのことを紹介・PRするのは心苦しいのですが、より当社を知り、親しみを持っていただければと思っておりますので、お付き合いのほどよろしく願いいたします。なお、10周年を記念したながしかも企画中です。こちらもご期待ください!

## HPをリニューアル予定です☆☆

近々、当社のホームページが新しく生まれ変わります。従来より、文字は大きく、はっきりと読みやすく閲覧性がアップするほか、情報も整理され内容も分かりやすくなります。また、リニューアル後は「お客様紹介」のコーナーも開設予定ですので、併せて楽しみにお待ちください!(トップページはスマートフォンにも対応しています)

## 「ご縁ブック2013」「2014年手帖」

毎年、ご好評をいただいております標記の2冊。次号6月号にて、作品の募集と購入ご希望のご案内を同封します。昨年「残念ながら見逃した!」というお声をお聞きしましたので、ぜひ6月号もお見逃しなく!



## ポストカード好評発売中!

毎回ご好評いただいている当社のオリジナルポストカード(1組8枚入り500円×各季節)。今回は春バージョンより「たんぼぼ」を同封いたしました。お気に召されましたら、同封のアンケート用紙にご希望の季節、セット数を明記のうえ、**必要金額分の切手を同封のうえ封書にてお申し込みください。**



## スタッフの一言

Q.「春」といって思い浮かぶ文学作品は? ※抱ぎたてのデコポンを持って撮影!

木戸敦子



春、高2の古典の時間。教師が秋の七草の「萩…尾花」と言うとき隣で寝ていた友達、小原恵美子がすごい勢いで「はい!」と立ち上がった。春眠不覚曉を実感した瞬間。

古川久美子



え、やっぱり「春と修羅」かな?先日、やっと文字で読んだばかりだし。でも、なんとなく、「不思議の国のアリス」も春っぽいなあと思ったりもします。あのエプロンドレスがたまらん!!

菅真理子



山村暮鳥の「風景」。いちめんのなのはな いちめんのなのはな いちめんのなのはな…という詩です。読んでみると、目の前に“一面の菜の花”がほわーっと浮かんでくるから不思議。

山田千秋



文学作品ではないかもしれませんが、春になると子供の頃、午後の授業でこし窓が開いていてカーテンがそよそよとびく感じの教室で音楽の時間に歌った曲が頭の中で流れます。「めだかの学校、さくら、春の小川、おたまじゃくし、etc…」

木伏美恵



金子みすゞの詩で、特に『星とたんぼぼ』『足ぶみ』。優しくあたたかい詩が、ぼかぼかした春の気持ちにしてくれます。ちなみに、私の母の若い頃の写真をみると、金子みすゞに似ている。

上村真智子



「細雪」の満開の桜、散る花びら、見上げる姉妹の色とりどりの着物、美しく雅に浮かび上がる印象的な描写。あとは「源氏物語」の春好む紫の上が秋好中宮に贈り物をする所など。

金子ゆり子



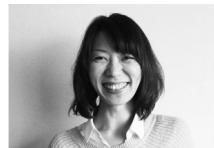
春といったら思い浮かぶ文学はないので情景にします。山育ちなので小川の綺麗な水。紫と白のスマレの花が浮かんできます。唱歌を歌いながら歩いてました。

石山由希子



ロシアの児童文学『森は生きている』。春ではなく、真冬のお話でした(あれれ)。「春の精」の出番は少ないものの、冬からあつという間に春へ!というサブライズが印象的。

吉田瞳



「くものすおやぶんとりものちょう」という絵本。春爛漫の虫の町、桜の花もまっ盛りでとにかく絵がきれい。右脳肥大化の吉田は絵を見て春を感じます。



1歳8ヶ月になりました。実を言うとなりの女の子の!!!♡





## モノローグ哀歌

科学技術の発達が社会に与える影響は大きいけれど、ここ二十年くらいで社会にもっとも影響を与えたのはおそらく携帯電話だろう。家庭外の人間とのコミュニケーションが個人化・密室化されたのつて本当に大きい。僕が高校生だった二〇〇〇年前後に携帯電話がいつきに浸透するようになったけれど、同級生で持っているのはせいぜい半分くらいだった。持っている生徒と持っていない生徒とは、交友関係の幅や他人との付き合い方がまったく異なっていた。ちなみに僕は持っていなかった。

しかし、コンパクト化されて持ち運び可能になったということは、電話が私領域を飛び越えて公共空間のなかにあるものとして出現したということでもある。「コミュニケーション用具」である電話が社会的に可視化されたことで、この社会のなかにある「コミュニケーション」観がよりあらわになってきた。

僕は以前、auのISO1という、シャープ製のスマートブック（スマートフォンと小型ノートパソコンの中間のようなモバイル情報端末）を使っていた。i-Phoneのような携帯電話型ではなく、まるで電子手帳か携帯ゲーム機、もしかしたらメガネケースとすら間違いかねない分厚い外観であり、かさばることこのうえなかった。もちろん電話としての機能もあるのだが、耳をつけながら話すスタイルは最初から想定されておらず、イヤフォンマイクを使ってハンズフリー状態で通話することが推奨されていた。

イヤフォンを耳にさし、電話機本体はかばんの中に仕舞って、手ぶらのままさっそうと歩きながら通話する。

## 山田 航

前回の「直通列車」には「筆致が瑞々しくて読みやすかった」ほか、「トロッコ列車で田舎まで密かに会いに行った昔を思い出した。その妻も生活の苦勞をかけたまま九年前に亡くなった」等という感想のほか、多数寄せられました。

ニューヨークでは当たり前の現代的でクールなスタイルを実践できる、というのがこの機種売りだった。しかし日本じゃそんなものまるで通用しないことに気付くのに時間はかからなかった。そもそもニューヨーク市民が本当にやっているのかどうか怪しいし。はたから見れば、イヤフォンを耳にさしながらぶつぶつ独り言をつぶやいて歩いているちょっと危ない人ではなかった。周囲が向けてくる視線の痛さの理由を察知した瞬間、この機種は絶対に売れないと確信するに至った。予想通り、発売開始からわずか半年足らずで販売終了となった。大失敗もいところである。たぶんシャープの経営危機とも少なからず関係があるはず。

日本社会は独り言への風当たりが異様に強いけれど、耳に電話機を当てていればその強風はほぼ無風化される。「電話で話しているだけなんだ」と了解され、周囲の人もすっかり安心。実は時報サービスを相手に喋っているのかもしれない。

今ではもう携帯電話サイズでパソコン並みの機能を持ったスマートフォンがすっかり浸透している。しかしこれから先どんなに電話が進化して技術的に不要になったとしても、「耳をつけて話す」機能はなくなるような気がする。日本社会って他者とコミュニケーションを取っていないのが通常状態で、取るときは「さあこれから取るぜ」というサインが必要なんだろうなあ。耳に電話を当てる、のような。

受話器とてそのまま落とす髪の毛もインクボト  
ルも凍る夜明け前  
穂村 弘

2013. 4. vol.67 (2013年4月10日発行/隔月発行)  
●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション  
〒950-0801 新潟市東区津島屋 7-17  
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550  
喜怒哀楽書房 株式会社ミュージズ・コーポレーション  
TEL 0120-819-395  
e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com  
郵便局口座番号 00530-4-81370 口座名 株式会社 ミュージズ・コーポレーション

## 編集後記

ようやく春が巡ってきた。寒かった冬も、過ぎてしまえば忘れるように、あの時は辛いと思ったことも、人は忘れるから前に進めるし、生きていくうえで防衛本能のような気もする。が、最近「忘却力」に拍車がかかり、同居人に「やばいんじゃない？」等と言われる始末。おまけに生来の鈍感力も持ち合わせているとなれば、これは立派な「老人力」ではないか？ 楽しい老後を送れるぞ！ などと一人悦びに入る。渡辺淳一の著書「鈍感力」によれば「鈍感なことは生きていくうえで強い力になる」とか。ほーら、やっぱりいいんだこれでっつてこれは自己弁護です！ 何事も春風のように程よくいきたいものです。(木戸敦子)